

楔形文字学習講座

楽しみ—それはビール
いやなこと—それは遠征
(ある粘土版より)

酒 井 龍 一

はじめに

わが奈良大学文化財学科にも、メソポタミアの楔形文字 (Rev. A. H. Sayce 1907 『The Archaeology of the Cuneiform Inscriptions』 Ares Publishers Inc.、C.B.F.Walker 1987 『Cuneiform—Reading the Past』 British Museum、杉勇1968年『楔形文字入門』中央公論社、その他) に関心をもつ学生諸君を散見(2～3人)する。当学科にとっては望外だが、結構なことである。本稿の目的は、その独習の指針となる文献や作業を提示し、諸君の初歩的な学習を促進させることにある。

ストリンドベリの提言

特異なる諸君に対し、事前に、次の言葉を謹呈する義務が私にはある。理由は、粘土版文書に直面した途端、各自で実感するだろう。ちなみに、楔形文字は「悪魔の記号」との噂がある。

「若者たちよ、アッシリア語を勉強しようなどとは、決して思ってはいけない。アッシリア語は言語ではない。たちの悪い冗談だ。A. ストリンドベリ」

(ジャン・ポッテロ/ジョセフ・ステーフ 1994年『メソポタミア文明』高野優訳創元社)。

わが文化財学科では、この悪魔の記号を除く、あらゆる学習しやすい課題を諸君に推薦するのが通例である。だが、ストリンドベリなどの適切な提言を無視し、楔形文字に敢えて挑戦する若人がいるならば、その勇気は讃えられるべきである。夢多き諸君に、女神イナンナの思し召しを！

女神イナンナを調べるには

粘土版文書などには様々な神が登場する。悪魔の記号の学習には神々の救済が不可欠であり、かつてメソポタミアを統治した諸王にも神々の加護が必要であった。女神イナンナは、シュメールの「金星神・愛と戦闘の神」（前田徹）である。ところで、当時の神様を調べる方法には、しかるべき解説書などを参照する方法（簡便主義）と、しかるべき粘土版文書などを読む方法（挑戦主義）がある。

例えば、Martha Ann and Dorothy Meyers Imel『Goddesses in the World』（1993 Oxford University Press）には、女神イナンナを含め、世界の神々が紹介されている。同書を読めば簡単に女神イナンナの概要はわかる。対して、楔形文字資料を苦勞して読めば、女神イナンナは、当初、「Princely Inana」・「Morning Inana」・「Evening Inana」・「Inana (from) Kur」などと呼ばれていた事実が判明する（Krystyna Szarzynska「Offering for the Goddess Inana in Archaic Uruk」『Revue d'Assyriologie 1』1993）。両主義のいずれを選択するのも自由だが、苦勞の字は若き学徒のためにあるというのが学問上の常識である。

粘土版に刻まれた神話や文学作品

粘土版に刻まれたオリエントの神話や文学などを、楔形文字の学習を実践する前に読みたい諸君には、杉勇代表訳『筑摩世界文学大系1』（1978年 筑摩書房）を推薦しておこう。同書によって、シュメール・アッカド・ウガリット・ヒッタイト・古代ペルシャ語などの主たる神話や文学を、実際の粘土版文書と一句たりとも異なることなく、諸君のなじみ深い日本語によって読むことができる。もちろん、女神イナンナの素性も知ることが可能である。

冒頭で紹介した「楽しみーそれはビール。いやなことーそれは遠征」を記したシュメールの粘土版の存在も、同書が紹介している。粘土版文書には度々ビールも登場。なれば、楔形文字学習の前途も何となく魅力的ではある。

楔形文字を使う言語

いわゆる楔形文字を使う言語は、シュメール語・アッカド語（古期アッカド語・バビロニア語・アッシリア語）・エブラ語・ヒッタイト語・パラ語・ルウィ語・フルリ語・ハティ語・ウラルトゥ語・エラム語（太古エラム語・エラム語）・古代ペルシャ語・ウガリト語などである。

学習を開始する時点で、各自は希望に応じて、一つか少数の言語を選択する必要がある。仮に、将来には全言語の習得を夢見るような楽観者であっても、当初は一つか少数に限定すべきであろう。本稿では、それらの言語のうち、諸君の関心が最も高いシュメール語とアッ

カド語を主に題材として解説していく。

各言語の概要

学習対象の選択に際して、各言語の概要を知る必要がある。については、亀井孝・河野六郎・千野栄一監修による『言語学辞典1～6巻』（1988～96 三省堂）を参照すればよい。だが高価な本なので各自で買うのは無理。なれば、図書館に行くべしである。

幸いにも、わが奈良大学図書館も保持しており、諸君の閲覧を心待ちにしている。やや高めめの学費は、有益なことにも使われている。同書は、地球上の各地・各時代のあらゆる言語を、アイウエオ順に網羅し、言語系統・分布・解読史・基礎資料・変遷・文字・音韻・文法・語彙・辞書・研究者・主要論文などを適切に解説している。以下、各言語の周辺を簡単に紹介しておく。

シュメール語

シュメール語は、メソポタミア南部に世界最古の文明と楔形文字を創出したシュメール人の言語で、その系統は不明である。前3000年頃から紀元直前までの刻文資料がある。前1900年頃にはアッカド語に主要言語の座を譲ったという。

諸君は、『History Bigins of Sumer（歴史はシュメールに始まる）』（1956 Thames and Hudson）というクレマーの有名な言葉をご存知だろうか。シュメール語の解読に生涯を捧げたS. N. クレマーの自叙伝『シュメールの世界に生きて』（久我行子訳 1989年 岩波書店）は、いかなる楔形文字言語を選択しても、最初の必読の書である。同書から、一人の若人がどのようにしてシュメール語の世界的権威になったのか、その学究の生き様を大いに学び取るべきである。1960年に来日したクレマー氏の様子は、加藤一郎「クレマー教授の印象」『西南アジア研究 8』（1961年）に詳しい。

ところで、日本のシュメール語研究は世界水準にあるという。その象徴が、本格的な論文集『Acta Sumerologica』（財団法人 中近東文化センター）の毎年の刊行（丸善でも取り扱っている）である。同書を手にした時、学習意欲が促進させられるか、はたまた直ちに挫折感を味わうか。それは、諸君の意気込みの程度で左右される。

アッカド語

アッカド語は、メソポタミア一帯でシュメール人と共存したアッカド人の言語で、東セム語系統に属する。体系的には、後のシナイ系のアルファベット文字を使うフェニキア語・アラム語・ヘブライ語などへと系譜する。アッカド語の表記には、シュメール語の楔形文字がそのまま借用された。従って、アッカド語はシュメール語と言語系統は異なるが、両方の学

習を平行して進めるのが当然とされる（あくまでの話）。上記の論文集『Acta Sumerologica』でも、両語を共に対象としている。

アッカド語は、サルゴン王の時代（前2334～2279年）頃から盛衰しながら、前1900年頃には国際語として機能し始めた。時代的には、古アッカド語（前2500～1900年頃）と後のバビロニア語（前1950～600年頃）とアッシリア語（前1950～600年頃）の両方言に区分される。

シュメール語とアッカド語の社会背景などは、例えば、クリトファー・ウォーカー『楔形文字』（大城光正訳 1995年 学芸書林）、ジャン・ポッテロ『バビロニア』（松本健監修 1996年 創元社）、ジャン・ポッテロ／マリ＝ジョゼフ・ステーヴ『メソポタミア文明』（矢島文夫監修 1994年 創元社）、あるいは前田徹『都市国家の誕生』（1996年 山川出版社）などが、ビジュアルかつコンパクトに解説している。なを、飯島紀氏が、シュメール語に関して5冊の日本語文献（各冊9000～10000円）を出されているが、本書ではあまり触れないでおく。

エブラ語

シリア北部の古代都市エブラ（テル・マルデック）で、1975年にイタリア隊が驚くべき宮殿文書庫を発見した。エブラ語は、そこの大量の粘土版文書（前2500～2400頃）に記されたセム語系統の言語である。『旧約聖書』の古代ヘブライとの関係を認めて、北西セム語系統中のカナン語（古代ヘブライ語）に近いとみる見解もある。

その発見と解説については、マイケル・ウァイツマンとハイム・バーマント『エブラの発掘』（矢島文夫監訳 1983年 山本書店）を参照すればよい。1964年に開始され大発見に至る感動的な発掘物語も記されている。同時に、調査団長パオロ・マッティエと碑文研究者ジョヴァンニ・ベッチナートとの葛藤の物語でもある。別に、その文書の概要を紹介した、Afif Bahnassi ed. 『Ebla Archives』（1993 Tlass）も参照されたし。あまり関係ない話だが、エブラ遺跡はシリア北部の都市アレppoの近くに所在するが、アレppo博物館のすぐ横には、アラビアのロレンスで有名なパロンホテルがあるよ。

ヒッタイト語

小アジアのヒッタイト王国で使用された印欧アナトリア語系統の言語である。独自の絵文字とアッカド語の楔形文字の両者を使用した。関しては、その首都・ハットゥシャ（ボガズ・キョイ）出土の粘土版文書（前1500年前後）が有名である。前1200年頃まで使用されたらしい。

については、「ハッティ国の楔と絵—楔形文字ヒッタイト語の解説、ヒッタイト聖刻文字の解説」『失われた文字の解説Ⅱ』（矢島文夫・佐藤牧夫訳 1963年 山本書店）・高津春繁・

関根正雄「ヒッタイト文書の解説」『古代文字の解説』（1964年 岩波書店）・C・W・ツェーラム『狭い谷、黒い山』辻理訳 1959年 みすず書房）の参照が望まれる。印欧アナトリア語（ヒッタイト語・パラ語・ルウィ語）に関しては、大城光正・吉田和彦『印欧アナトリア諸語概説』（1990年 大学書林）を参照されたし。最近の新聞広告を見ていると、なぜか、やたらにトルコ旅行の宣伝が目につく。

パラ語・ルウィ語・ハッティ語

パラ語は、上記のボガズ・キョイ出土の資料（前1500年前後）に記された印欧アナトリア系統の言語である。ルウィ語は、同じくボガズ・キョイ出土のヒッタイト語文書中（前1500年前後）に引用されていた印欧アナトリア語系統の言語である。そして、ハッティ語は、小アジアのヒッタイト王国の先住者・ハッティ人の言語で、ボガズ・キョイ出土のヒッタイト語文書中に見られる。ヒッタイト王国が繁栄した前14世紀頃には既に死語だったという。

小アジアの古代文明に興味のある諸君は、ヒッタイト語に加え、可能なら、これら諸言語も対象にする必要もあろう。パラ語とルウィ語に関しては、大城光正・吉田和彦『印欧アナトリア諸語概説』（1990年 大学書林）を参照のこと。

フルリ語・ウラルトゥ語

北シリアのユーフラティス河上流でミタンニ王国を起こしたフルリ人の言語で、エジプトのエル・アマルナで発見された外交文書（前1400年頃）などが有名。ウラルトゥ語との関係が深い、言語系統は不明とされる。また、ウラルトゥ語は、チグリス河上流のヴァン湖付近で王国（前700年前後）を建てたウラルトゥ人の言語である。初心者用の手引書は不明で、(財) 中近東文化センターなどで検索を願いたい。

エラム語

イラン西南部の王国を建てたエラム人の言語で、その系統は不明。大きくは、原エラム語（前3000年前後）と中期エラム語（前1300年前後）に区分できる。初源はピクトグラムによる原エラム語で、シュメール語のピクトグラムに遅れて出現したらしい。初心者の手がかりとなる手近な文献は知らない。(財) 中近東文化センターなどで各自で検索していただきたい。エラム語の研究者は少ないが、例えば川瀬豊子氏がおられる。

古代ペルシャ語

イランのアケメネス朝ペルシャの宮廷言語で、インド・イラン系統に属する。同王朝の国王・ダリウス1世（在位前522～486年）の命令で文字が創作されたという。G. H. グローテ

フェントやH. ローリンソンなどの努力により、イラン南西部にあるベヒストゥンのダリウス王の三ヶ国語（エラム語・バビロニア語・古代ペルシャ語）碑文中、先ず古代ペルシャ語の楔形文字の解読が実現した話は周知である。

興味あふれる解読史は、E. ドーブルホーファー「アフラマズダが余を援助せり—古代ペルシャ文字の解読」『失われた文字の解読Ⅰ』（矢島文夫・佐藤牧夫訳 1963年 山本書店）や、高津春繁・関根正雄「楔形文字の解読」『古代文字の解読』（前出）を参照されたし。

ウガリト語

シリア北部の地中海沿岸に位置する古代都市・ウガリト（ラス・シャムラ）から出土した粘土版（前1300年前後）に記された言語である。楔形文字を使いつつも、フェニキア語や古代ヘブライ語と似て、30（32）字のアルファベット体系をとる。実際に楔形文字のアルファベット一覧表が出土したことでも有名である。

ついで、ドーブルホーファー「白い港の茴香岬と紙の町グブラーウガリット語とグブラ語の解読」『失われた文字の解読Ⅱ』（前出）、高津春繁・関根正雄「ウガリット文書の解読」『古代文字の解読』（前出）、R. シルヴァバーク「ウガリット—楔形文字」『埋もれた古代文明』（三浦一郎・清水昭次訳 1974年 法政大学出版会）を参照されたし。

諸君も、この言語を選択して、かつて世界征服を夢見たであろうウガリット人がしたように、白い港の茴香岬に立って、あの大地中海の光輝く銀鱗を望もうではないか。

各語の楔形文字一覧

学習対象の言語決定前に、各言語の楔形文字一覧（サインリスト）を見たい諸君もいるだろう。しかしながら、各言語すべてのサインリストを一冊に集合させたような便利な本はない。各自で候補とする言語のサインリストを発見してほしい。上記の『言語学辞典1～6巻』には各語の解説はあるが、全言語のサインリストは掲載されていない。

そこで、世界の文字研究会編『世界の文字の図典』（1993年）などを参照して、手がかりを掴んでいただこう。ちなみに、シュメール語とアッカド語の正式なサインリストの一つは、René Rabat『Manuel d'Épigraphie Akkadienne』（1988 Geuthner）である。ヒッタイト語の主な文字は『印欧アナトリア諸語概説』に、字数の少ない古代ペルシャ語とウガリト語の文字一覧は『世界の文字の図典』にもみられる。

楔形文字一般に関する参考書

楔形文字と言語一般に関し、次の文献などからも各種情報を入手することが望まれる。

Peter T. Daniels and William Brighy eds. 1996 『The World' Writing Systems』

Oxford

Florian Coulmas 1996 『Encyclopedia of Writing Systems』 Blackwell

Hans Jensen 1970 『Sign, Symbol and Script』 George Allen & Unwin

Andrew Robinson 1995 『The Story of Writing』 Thames and Hudson

David Diringer 1982 『The Book before Printing』 Dover

Beatrice Andre Leicknam and Christiane Ziegler 1998 『Naissance de l'écriture』

Reunion des Musees Nationaux

カーロイ・フェルデシ=パップ 『文字の起源』 矢島文夫・佐藤牧夫訳 1988年 岩波書店

矢島文夫監修 1995年 『文字と人間』 平凡社

メソポタミア文明に関する基本図書

様々な言語学的な情報に加えて、その文化・社会・政治・宗教・神話・人名・地名・神名・遺跡・都市国家など、様々な文化的情報の収集も不可欠となる。そうした場合、例えば、Jack M. Sasson chief ed. 『Civilizations of the Ancient Near East』 (1995 Charles Scribner's Sons 全4巻) や Amelie Kuhrt 『The Ancient Near East c. 3000–330BC I・II』 (1997 Routledge) が基本文献となる。前者の言語美術編たる第IV巻から、主な論文と著者を紹介しておく。

a 「Record Keeping Before Writing」 (pp.2097–2106) Denise Schmandt-Besserat

b 「The Sumerian Language」 (pp.2107–2116) D.O.Edzard

c 「Semitic Languages」 (pp.2117–2134) John Huehnergard

d 「Indo-European Languages of Anatolia」 (pp.2151–2159) H.Craig Melchert

e 「Less-Understood Languages of Ancient Western Asia」 (pp.2161–2179) Gene B.

Gragg

f 「Archives and Libraries in the Ancient Near East」 (pp.2197–2209) J. A. Black and

W. J. Tait

g 「The Scribes and Scholars of Ancient Mesopotamia」 (pp.2265–2278) Laurie

E.Pearce

h 「Sumerian Literature: An Overview」 (pp.2279–2291) Piotr Michalowski

i 「Akkadian Literature: An Overview」 (pp.2293–2303) Jean Bottero

j 「Ancient Mesopotamian Lexicography」 (pp.2305–2314) Miguel Civil

k 「The Deeds of Ancient Mesopotamian Kings」 (pp.2353–2366) Mario Liverani

l 「Hittite and Hurrian Literatures: An Overview」 (pp.2367–2377) Alfonso Archi

a は、前8000～3500年の「token（トークン）粘土製の数量表示品」をとりあげ、それがシュメール語のピクトグラフと楔形文字の出現に果たした重要性を概説したもの。b は、楔形文字を創出したシュメール語を概説したもの。c は、シュメール語の楔形文字を借用したセム語系統のアッカド語を、シナイ系アルファベット文字を用いるフェニキア語・アラム語・ヘブライ語など、セム諸語と共に概説したもの。d は、アナトリア（小アジア）におけるインド・ヨーロッパ語族でかつ楔形文字を用いたヒッタイト語・パラール語・ルーウィ語を概説したもの。e は、フーズスタン（イラン）のエラム語、チグリス上流のフルリ語、ユーフラテス河上流のウラルトゥ語、小アジアのハッティ語等の概要を記したものである。

f は、「楔形文書（粘土版）」とそれが保管されていた「書庫（文書館・図書館）」をとりあげ、楔形文字世界（メソポタミア）とヒエログリフ世界（エジプト）との実状を概説したもの。g は、楔形文字を実際に刻み込んだ「書記」をとりあげ、その実状を概説したもの。h・i・l は、それぞれシュメール語・アッカド語・ヒッタイト語による文書内容を「文芸」という観点で概説したものである。

j は、当時の書記達が他の言語を学習するための各種「辞書類」にまつわる実状を概説したもの。実際に、異言語間の橋渡しをする「文字集（サインリスト）」・「字音表（シラバリーリスト）」・「同意語集（シノニムリスト）」・「語彙集（ヴォキャビュラリーリスト）」・「単語集（ワードリスト）」等の存在によって、各語の解読が可能となった経過がある。ついで、杉勇1991年「楔形文字の「字音表」と「語彙」『古代オリエント学論集 中洋の歴史と文化』（筑摩書房）なども参照されたし。そしてk は、メソポタミアにおける「王」に焦点をあて概説したものである。楔形文字を学習する場合、そこに度々登場する様々な王の実状も理解しておく必要がある。

初歩学習の道具類

学習対象の言語が決定すれば、いよいよ当該言語の楔形文字（Cuneiform）の習字を開始することになる。楔形文字の第一字目を覚えて、学習の第一歩を踏み出すのである。そこで、シュメール語やアッカド語を例にしながら、文字の筆記練習（作業1）・簡単な文書の筆写練習（作業2）・文字帳の作成（作業3）・単語帳の作成（作業4）などを簡単に解説しておく。当初は、本格的な文法書や論文や辞書は不要である。

その代わりに、ペンや鉛筆・ノートとカード・油粘土・割り箸と、サインリストと簡単なテキストを用意していただきたい。わが文化財学科は、小難しい勉強を極力避けて、「楽しい考古学」を目指しているのが特徴である。

筆記練習・筆写練習

筆記練習（作業1）と筆写練習（作業2）は、眼前のサインリストや簡単なテキストをみながら、文字個々の習字と文書の筆写を試みるものである。当初は、単語や文章の意味は不明でも、とにかく文字の筆写練習を重ねよう。順序は、先ず作業1（文字個々の習字）に集中し、次第に作業2（文書の筆写）に重点を移していく。

両作業とも、鉛筆やペンを使ってノートやカードなどに文字やテキストを筆記・筆写する練習（A練習）と、自作の粘土版に自作クサビを使って実際に文字やテキストを刻書する練習（B練習）がある。実際には、両者を平行して進める必要がある。わが文化財学科では、イベント的な雰囲気の良いB練習も大いに重視している。

白字と黒字

楔形文字を筆写する場合には、「白字 hollow signs」と「黒字 solid signs」の区別がある。原則的には、楔の輪郭をなぞって書く白字（白抜き文字）は、粘土版に刻まれた文字の場合、対する楔を塗りつぶして書く黒字は、石碑などに刻まれた文字の場合である。従って、論文などに掲載されている筆写テキストが、本来、粘土版に刻された文書か、石碑などに刻された文書かを、一見して識別できるようになっている。例えば、有名なベヒストゥンの岩壁に刻まれた古代ペルシャ語によるダウリス王の碑文は、原則的には、黒字で筆写することになる。

テキストの種類

筆記・筆写練習には、サインリストやテキストが必要となる。テキストの種類には、粘土版文書などの実物（A種）・実物の複製品（B種）・実物の写真（C種）・粘土版文書などを専門家が筆写した文献（D種）がある。各自の学習環境によっては、粘土版資料が皆無の場合もある。わが奈良大学はその実例である。初心者は当面、概説書に印刷されたサインリストやテキストで十分といえる。

初心者は、サインリストやテキストを眼前にして、それを丁寧に筆記・筆写する作業から始める。粘土版などの写真テキストは、楔形文字個々の細部が不鮮明な場合が多く、正確な文字判別には熟練を要する。習字が大いに進行すれば、鮮明な写真テキストを選んで筆記・筆写練習となる。そして、いずれ条件が許せば、あこがれの粘土版など実物資料を眼前にしながらか筆写練習に挑戦すればよい。

国内の粘土版文書

国内では、京都大学・広島大学・東京大学・国立民族学博物館・大阪市立美術館・(財)中近東文化センター・(財)オリエント博物館・岡山市立オリエント美術館・天理大学・その他に、実物資料が保管がされている(吉川守「日本の楔形文字資料について(1)」)。以下に、その紹介文をいくつか掲げておく。それ以外にも多数の実物資料が国内に保管されているが、各自、対象言語に応じて捜査をしていただく。ちなみに、広島大学には500個以上の粘土版文書が保管・公開されている。

吉川守「大阪市立美術館陳列のシュメール語銘辞に就いて」『古代文化 3-1』(1959年)、吉川守・松島英子「東京大学東洋文化研究所所蔵の Bilingual Lexical Tablet」『オリエント 23-2』(1981年)、Mamoru Yoshikawa「A Fara Tablet in a Japanese Collection」、Tohru Gomi「Ten Cuneiform Texts from some Japanese Collections」[註 欠落している年号や文献名は、私がメモし忘れた故]。

筆記練習の教本

筆記練習に有効な教本を推薦する。例えば、Daniel C. Snell『A Workbook of Cuneiform Signs』(1979 Undena)である。初心者には最適の教本である。私が知る限り、日本語による楔形文字の練習教本はない。同書は、アッカド語中の新アッシリア語で使用頻度が高い約110の楔形文字を練習し、体得することを目的に作成された自習用の習字帳である。

面白いことに、著者は、日本語の「かな文字」の習字帳からヒントを得て楔形文字の習字帳の作成することを思いついた。全体を8つのセクションに分け、各セクション毎で15の文字を徹底的に練習し、完全に覚え込んだ後に、次のセクションに進むように構成されている。他言語の場合も、独自で工夫して習字を実施すべきである。

楔個々の筆順

「楔形文字」の名称が示すように、各文字を構成する基本要素は、三角形の頭部と直線の体部からなる楔形の彫り込み(wedge 楔)である。その多様な組み合わせで各文字がなりたつ。シュメール文字や古式のアッカド文字は、絵文字的な様相が強いので、楔数(画数)も多く、複雑な形状をしている。時代が新しくなると、次第に楔数も少なく、水平の楔・斜めの楔・垂直の楔を基本とする整然とした字形となる。上記のスネールによれば、各楔の輪郭を、筆記具でノートなどに書写する場合の筆順は、頭の二辺から書き始めて、次いで頭の残り一辺と直線の体部へと進むと説明されている。

粘土版と筆記道具

楔形文字を創出したシュメール人たちは、以前から絵文字を粘土版に書き込んでいた。前2900年頃になると、葦の茎の先端を三角・尖・線（細い三角）・丸の形に削って、各種の筆記道具（stylus「刻みペン」と仮称）を作り、三角ペンは楔の頭部、尖ペンや線ペンは楔の直線部や線、そして丸ペンは数字を、それぞれ打ち込む時に主に使用したらしい。刻みペンの実物は出土していないようだが、練習用には、油粘土で粘土版を、また割り箸を適切に削って各種の刻みペンを製作し、それぞれ代用すればよい。ただし、油粘土の取り扱いには苦慮（永らく放っておくと油が滲みでてくる）するが、割り箸は学内でも自由に調達できる（新品は無用である）。

文字帳の作成

習字の進行に応じて、各自のノート・カードを用いて文字帳を作成していく必要がある。ところで、各語によって文字数は多様である。最も多いのが、シュメール語の約2000。最少はウガリット語の30（32）である。下記の文献では、シュメール語は約2000、古アッカド語は約800、バビロニアアッシリア語は約700、エラム語は約113、古ベルシャ語は41、そしてウガリット語は30（32）と紹介している（Florian Coulmas『Encyclopedia of Writing Systems』1996 Blackwall）。

従って、シュメール語を選択すれば大いに手間がかかり、ウガリット語を選択すれば一瞬という実状となる。各自が何語を選択するかで苦楽の差が生じる。すべて神の思召しの差である。更に、シュメール語やアッカド語の字形は、時代によって大きく変化する。

シュメール語とアッカド語の文字辞典

ウガリット語や古代ベルシャ語に比べ、シュメール語やアッカド語は字数が極めて多い。上記のスネールによる練習帳は、冒頭で、René Labat『Manuel d'Épigraphie Akkadienne』（1995 Geuthner）を利用せよとの指示がある。同書は「シュメール・アッカド文字辞典」とも称すべき346頁の大著で、各文字の時代的な変異形を華麗な「手書き文字」で表記している。楔形文字の研究者はかくあるべし、との模範演技が開陳されている。

文書を正確に書写する作業は、土器研究者が土器を実測するのと同様、解読専門家の最大の責務となる。日頃から筆写能力を養う訓練が不可欠である。なを、サインリストの順番は、水平方向の楔数の少ないものから多いものへ、次に斜め方向の楔数の少ないものから多いものへ、そして縦方向の楔数の少ないものから多いものへと、それぞれ文字が配列されている。

部首分類

約2000のシュメール文字を、飯島紀（『シュメール人の言語・文化・生活』1996年他 泰流社）は、漢字の「部首」という概念で大きく分類し、検索を合理的に行う方法を提示している。字形から、「四角型・段差型・葦型・筏型・女陰型・長靴型・テント型・菱形・壺型・袋型・動物型・二本足型・魚鳥型・簡易型」に分類・命名している。初心者にとって、この分類法は極めて便利である。もちろん、アッカド語に使用される文字に対しても適応可能である。

複写・翻字・転写とは

文書をノートなどに表記する場合、いくつかの方法がある（Thomas A. Caldwell, S. J. 他『Akkadian Grammar』1974 Marquett University Press）。すなわち、手書き複写（ハンドコピー）・翻字（transliteration）・転写（transcription）あるいは規格化（normalization）・単語訳（word translation）と文章訳（literal translation）である。

ハンドコピーは、文書を楔形文字のまま手書きすること。別に、コンピューターで楔形文字を読みとり、楔形文字で表記する実例は、Hans J. Nissen・Peter Damerow・Robert K. Englund『Archaic Bookkeeping』（1993 Chicago）に紹介されている。楔形文字をワープロ・パソコンで打ち出す方法は、かなり以前のことになるが、小林義尚が「ワープロによるシュメロ・アッカド楔形文字作成およびその運用の成果と問題点」『オリエント 30-1』1987年）で紹介している。

翻字とは、楔形文字個々に対応するアルファベット（a b c・・・）に変換し表記すること。一つの単語を構成する文字群はハイフンで結ぶ（w a - a r - d u - u m）。でなければ空間をあける。転写・規格化とは、一つの単語を構成する翻字群を、発音に沿って一つの単語として表記（重複する文字を整理して一字とする w a r d u m）すること。これ（w a - a r - d u - u m → w a r d u m）を翻字群の単語化である。単語訳は各単語の訳（w a r d u m ⇨ 「召使い」）、文章訳は単語群全体を文章としたものである。

シュメール語の練習帳

練習帳として、John.L.Hayes『A Manual of Sumerian Grammar and Texts』（1990 Urdena）がある。同書は、一週3回の授業で23回分（1 Semester）で終了する。有名なウルナムム（Ur-Namma）に関する、ウル第Ⅲ王朝時代（前2100～2004年）の簡単なテキスト等を使いながら、文字リスト・単語リスト・複写文・翻字（transliteration）・転写（transcription）・翻訳（translation）を提示し、それぞれ詳細な解説がある。

初心者には、先ず「テキスト1」を習字しながらノートに書き写し、解説を読みとりながら、自らの文字カードや単語帳に書き込み、改めて次の「テキスト2」・「テキスト3」と進んでいく。同書には、シュメール語自体の言語学的な概要や歴史的な変遷等も詳細に紹介されている。なを、シュメール語全体は、ここでは、「Archaic Texts (3100BC)」・「Archaic Sumerian (3100-2600BC)」・「Classical Sumerian (2600-2300BC)」・「Neo-Sumerian (2300-2000BC)」・「Post-Sumerian (2000BC-100AD)」に区分されている。

シュメール語の文法書

本格的な文法書として、Marie-Louise Thomsen『The Sumerian Language』(1984 Academic Press)がある。「歴史と文法構造入門」の副題を付けて、コペンハーゲンで刊行されたもの。内容は極めて専門的である。複雑な動詞組織に関しては、日本語で解説されても、初心者には著しく難しい。また、テキストは楔形文字でなく、翻字化されている。実際のシュメール文字を検索するは、上記のRené Labat『Manuel d'Épigraphie Akkadienne』を携帯のこと。

なを、シュメール語の文字をローマ字のアルファベットで翻字化する場合、直立字体（読み方が決定していない場合はローマン大文字・読み方が決定している場合は小文字）を、アッカド語の文字の翻字化はイタリック小文字（斜め字体）を用いる習慣がある。

シュメール語とアッカド語の関係

本来は、シュメール語（言語系統不明）の解読はアッカド語（セム語系統）の解読を踏まえて可能という（吉川守「バビロニア人のシュメール語研究について—その1・その2—」1961・1962年）。初心者には雲の上の雲の上のような話である。アッカド語を使うバビロニア人達は、「語彙表」や「字音表」などを作ってシュメール語の理解に努めたという。こうした問題に関しては、杉勇「楔形文字の「字音表」と「語彙」」『古代オリエント学論集 中洋の歴史と文化』1991年）も合わせて参照されたし。

それらの実例に関心あれば、例えば、P. E. Van Der Meer『Syllabaries A, B and B with Miscellaneous Lexicographical Texts from the Herbert Weld Collection』(1938 Oxford University Press)でも見ていただこう。キッシュ出土の諸資料である。

当時の文法テキスト

初心者ながら、シュメール語文法を、当時の原書（粘土版文書）レベルで内容を所望される方には、解読史の初期のArno Poebel『Grammatical Tests』(1914 University of Pennsylvania)を一見すればよい。だが極めて難しい。本書の序文を書いたG. B. ゴード

ンによれば、A. ペーベルは、1913～14年にかけて、ペンシルバニア大学に保管されている粘土版文書から専ら文法に関する文書を書写する作業に従事し、それを翻訳しつつ作成したのが同書という。戦争が原因で未完成となったが、後日、出版された。以下、その目次を掲げておく。その後半が続いて刊行された可能性があるが、未見である。

- I. The Noun-Governed Complex in Sumerian
 - Morphological Change
 - The Sequenc of the Modifying Elements
- II. The Personal Pronoun in Sumerian
 - Transcriptions and Translations
 - The Forms of the Personal Pronoun
 - Analysis of the Personal Pronouns
- III. The Sumerian Verb
 - Transcriptions and Translations
 - Paradigms of Sumerian
 - Verbal Forms
 - Analysis of the Sumerian Verbal System

数量表記体系の学習

本格的な楔形文字が、そもそもトークン（粘土製の数量表記物）に記されたピクトグラムの数字や粘土版に記された物品の簡単な簿記から生成・発展・確立したという歴史的事情から、シュメール語やアッカド語文書の数量表記体系を学習する必要がある。いわゆる算数の学習である。初期のトークンに関しては、例えば、「Early Tokens and Tablets in Mesopotamia : New Information from Tell Abada and Tell Brak」『World Archaeology 17- 3』(1986)などを参照のこと。

数量表記体系に関しては、Hans J. Nissen・Peter Damerow・Robert K. Englund『Archaic Bookkeeping』(1993 Chicago)が基本文献となる。同書は、ウルクから出土した前3000年以來の各種の簿記文書の解読を通して、各数字と基本的には60進法の数量表記体系を詳細かつビジュアルに説明。巻末には、コンピューターを用いた楔形文字の書取りシステムの実例を紹介している。分銅重量に関しては、岩田重雄「古代メソポタミアにおける質量標準の変化」『オリエント25- 1』(1982年)で解説されている。

簿記文書の学習

上記の文献を参考にして、例えば、Marcel Sigrist 『Old Babylonian Account Texts in the Horn Archaeology Museum』(1990 Andrews University) のような簡単な簿記文書を用いて解読練習することも可能である。同書は、アンドリュース大学のホーン考古学博物館が保管する102個の古代バビロニア語の簿記文書を、M. シグリストが翻字と英訳をかかげたもの。初心者は、本格的な文書でなく、先ず物品を示す単語と数字による簡単な文書の解読練習を積み重ねて、習字・文字帳・単語帳を充実させていくことが望ましい。

楔形文字の算数

文化財学科は文学部に所属している。ここに所属する私は、楔形文字にも算数にも決定的に弱い。だが、仮に諸君が楔形文字にも算数にも挑戦しようとする勇者ならば、例えば、ここに紹介する粘土版とその報告書を学習すべきである。すなわち、E. M. Bruins and M. Rutten 『Textes Mathematiques de Suse』(1961 Librairie Orientaliste Paul Geuthner) である。

楔形文字を使って、足し算・引き算・かけ算・わり算・面積計算などができれば、何と幸せではないか。もちろん、友達にも特異なる技を自慢できよう。それらを組み合わせた複雑な計算も、当時の彼らは実施していた。ここに紹介された文献を学習することによって、ますます楔形文字と算数に磨きをかけていただきたいものだ。

アッカド語のハンドブック

アッカド語のハンドブックとして、例えば、Douglas B. Miller and R. Mark Shipp 『An Akkadian Handbook』(1996 Miller and Shipp) がある。内容は、基本的な文法に加えて、598以上の基本的な文字リストとその読み方一覧、650以上の基本単語集(地名や人名などを含む)などを掲載し、初心者必携の文献として推薦できる。なを、本書の文字リストにはいわゆる新アッシリア(前1000~600年)の文字で、簡略化が進行している。初心者は、古式の複雑な文字より、簡略化が進んだ文字の方が覚えやすい。シュメール語の文字を借用した当初からの、各時代の文字形は、先述の Renē. Labat 『Manuel d'Épigraphie Akkadienne』(1995) を参照すればよい。

アッカド語の練習帳

アッカド語の学習を進める上で指針となる、初心者用の練習帳を紹介する。例えば、David Marcus 『A Manual of Akkadian』(1978 University Press of America) である。

同書は、事前にアッカド語の概要と基本的な文法などを紹介した上で、有名な「ハムラビ法典」・「イシュタルの冥界下り」・「センナケリブの年代記」から抜粋した楔形文字テキストを、19回に分けて詳細に解説したものである。

この練習帳を利用する場合、先ず各自、冒頭の楔形文字テキストを繰り返して筆写練習すれば効果的である。楔形文字文をテキストとした練習帳や教科書は意外に少ない（翻字テキストが多い）。各単語個々に対し、文法的にも詳細に解説が加えられており、ノートを取りながら「文字帳」や「単語帳」を次第に充実させていける。楔形文・翻字文・単語化文・翻訳文の四種が掲げられていることも、学習には便利である。

アッシリア語の古典的な練習帳

一冊の興味ある練習帳を推薦しておく。J. D. Prince and E. A. W. Budge 『Assyrian Primer and Assirian Texts』(1909・1880 Area Publishers) である。同書は、今から100年前後前の出版物の復刻版で、実際には二冊の本が合冊されている。この練習帳を使って、百年前に立ち戻って楔形文字の学習を楽しんでいただこう。

一冊目の『アッシリア語入門－楔形文字学習の帰納法的方法』は、題目が明示するように、楔形文字の読み書き練習を目的としたもの。初期の入門書だけに、いかにも丁寧に解説がされている。前半は、音価の単純な文字による単語を、後半は音価の特定がやや難しい文字による単語を学習するよう工夫されている。いずれにしても、基本的な単語の学習には極めて有効である。なお、アッシリア語はセム語系統の言語であり、巻末の単語集はヘブライ文字に翻字して表記されている。

二冊目は楔形文字文書集で、掲載された文書抜粋の英文題目は次のとおりである。「Arabian War of Assur-bani-pal」、「Annals of Sennacherib mission of Gyges, King of Lydia, to Assur-bani-pal」、「Sennacherib's Expedition to the Persian Gulf」、「Expedition of Shalmaneser II. against Hazael, King of the Hittites」、「First Egyptian War of Assur-bani-pal」。巻末に各文書の単語解説がある。

アッカド語の文法書

練習帳を用いた初歩的な学習が進行すると、基本的な文法を学習したいという諸君が現れるだろう。なれば、『An Akkadian Grammar』(1990 Marquette University Press) が推薦できる (Riemschneider 『Lehrbuch des Akkadischen』の英訳版)。最初に、アッカド語の基本的な文法が概説され、それを踏まえて、27レッスンに分けて解説がある。すべて翻字文である。情熱ある諸君は挑戦されるがよからう。

各レッスン毎に、学習すべき文法の主題がある。それぞれ詳細な解説がなされ、最後に長

文のテキストと単語集が示される。例えば、「名詞の複数形」が主題となる「レッスン3」では、「男性名詞の複数形」・「女性名詞の複数形」・「動詞における複数形」・「所有格接頭-ya, my」など、実例となる単語を例示しながら、複数に関する様々な解説が進められる。だが、内容はあくまで本格的な文法書であり、全レッスンの学習を貫徹するには根性が不可欠となる。決意すれば頁を開き、挫折をすれば閉じ、再び気を取り直して頁を開くという、気楽な戦法で結構である。

ウガリト語の文法書

話題を変えよう。ところで、『旧約聖書』の好きな諸君もいるだろう。同書は古代ヘブライ語（一部はアラム語）で書かれているが、最も関係深い楔形文字言語となれば、ウガリト語である。シュメール語の約2000字を筆頭に、各言語とも諸君が覚えるべき文字数が多いが、ウガリット語は30字（32字）である。多数の文字を覚えたくない、覚えられない、あるいは覚える気がないような諸君には、このウガリット語を推薦する。

初心者には、文法書が一冊、すなわち Stanislav Segret 『A Basic Grammar of the Ugaritic Language』(1984 University of California Press) があれば、当分は楽しめる。内容の大半は、ウガリット語の基本文法のきめ細かな解説だが、後半は、青銅製斧に刻されていた単語2語の解読練習から始まり、次第に長文の解読練習へと進行するようになっている。巻末には、諸テキストの単語集が付く。従って、前半の文法解説および後半の諸テキストと単語集を用いて、各自でウガリット語の独習が可能である。なを、ウガリット語の学習には、ヘブライ語の学習が有効であることを申し添えておく。

マリ文書

私事で恐縮だが、私の末娘の名前は「麻里」という。先日、奈良大学の泉拓良教授や西山要一教授らと共にルーブル美術館に行った妻が、偶然にも、『MARI Annales de Recherches Interdisciplinaires』(1997 Ministere des Affaires Etrangères) という800ページ余の大著を土産に買ってきてくれたのには驚いた。そこには、有名なマリ遺跡出土の粘土板の最新の解読成果が報告されていた。それだけの話である。

おわりに

突然だが、ここで「楔形文字学習講座」を終了する。楔形文字に強い関心をもつ特異なる諸君が、本書で紹介した文献や作業などを参考に、その学習を決心・開始してくれば幸いである。

【謝辞】

楔形文字に全くの門外漢の私は、学生1名と共に、1997年12月19・20日に京大会館で開かれた、「シュメール研究会」に参加するという貴重な初体験をさせていただきました。つきましては、私達の厚かましいお願いを受け入れて下さった小野山節先生・前川和也先生・前田徹先生を初め、主催あるいは参加の諸先生方には、心から感謝の意を表します。ありがとうございました。また同会では、既に楔形文字の研究に邁進されている2名の澆刺たる若人の姿も実見することができました。前途洋々の彼・彼女にも、同席させていただいた御礼と共に、将来における御研究の発展を心からお祈りいたします。